

**35°0' 31.7" N 135°45' 58.74" E**  
**Kunitani Takashi Exhibition**

2011年の個展「Mars」、2012年の個展「make a mistake in choosing」に続きPARCでは3回目の個展開催となる国谷隆志(くにたに・たかし / 京都・1974~)は、オブジェや彫刻を中心としたインスタレーションにより、物事や空間の性質を顕在化させるサイト・スペシフィックな作品に加え、物事を認識・理解するためのプロトコル(相互の規定・手順・約束事など)を見定め、それらを軽妙に攪拌することで起こる体験の作品化にも取り組んでいます。

『人間の空間への関わりにおいて、自分を取り巻く世界、物事についてのあり方を問うこと』に加え、『さらには人はそれらとどのように向き合うのか』に関心を寄せている国谷の作品にあって、とりわけネオンによる一連の作品は、展示空間において「不自然な光を放つネオンによる抽象的なオブジェクト」という理解の埒外にある事象によって鑑賞者を幻惑します。鑑賞者はその一瞬において、まず「身体(自己)」への自覚を促され、次第に空間・作品へとそれぞれを点検・確認すること、世界を再認識・再構築する体験を作品として提示するもので、それまでの「特定の場」に限定したサイト・スペシフィック性を超え、「作品の在る空間と鑑賞者」の存在に場を求めた作品といえます。

Gallery PARCでは3回目の個展となる本展は、そのタイトルをギャラリーの座標である「35°0' 31.7"N 135°45' 58.74"E」としています。本展ではこれまでのネオンによる作品構成とは異なるアプローチにより、「作品・空間・身体(=オブジェクト・世界・鑑賞者)」のそれぞれを顕在化(対象化)させることにより、世界を認識・解体・再構築する一瞬の体験を提示しています。

国谷によってステンレススチールに10mm間隔でグリッド(引っ掻き傷)が刻まれた《Mirror Site》は、鏡面に写り(映り)込んだ像を強制的に区画し、鑑賞者を含む世界を「対象」として提示しています。また、《Sand Piece》では鑑賞者の手によりすくいあげられ、落とされた砂はその場に在る時間の流れを顕在化させながら堆積し、そこに永遠に違う「砂山」をつくりあげます。

国谷の作品を前に鑑賞者は、そこに「身体(私)」が、今、ここ(空間)にあることへの自覚を促されるとともに、「自身」と「今」と「世界」を「構造と対象」として主体的に捉えなおす機会に出くわします。自己という存在、時間という運動、世界という対象。これらはいずれも当然のこととして絶えずその場に存在するからこそ、その認識を疑いかけることはあまりなく、客観性を伴い難い曖昧さそのものとして共有されているといえます。それらを少しだけ顕在化させることで、鑑賞者にそれぞれの再認識を促す国谷の作品は、鑑賞者の存在無くしては作品として完了せず、またすべては鑑賞者の主体・主観において作品化されるといえます。

展示空間となるギャラリーを「座標」に置き換えた本展タイトル「35°0' 31.7"N 135°45' 58.74"E」には、これまで国谷が提示してきた「認識」の範囲を、展示空間内からさらにマクロ的視点に広げようとする意志が込められています。また、国谷は12月1日[日]まで成安造形大学(滋賀)で開催している個展「35°6' 29.15" N 135°54' 9.63" E」にも《Sand Piece》を出品し、鑑賞者はこの二つの地点を砂を持って移動し、それぞれに介入することが可能となっている。

**s t a t e m e n t**

「空間」の存在を考える上で「身体」を抜きにすることは難しいだろう。それは、私たち人間の身体が常に空間の中に置かれているのと同時に空間を自らのものとすることによって環境を捉えているためだ。作品が身体感覚に働きかけると私たちは思考によってそれを把握し、統合する。

作品は単なる物質として捉えられるのみではなく、場として身体の一部となる。それは論理や認識のレベルではなく、内面的な領域へと思考を拡大していくことである。

私は、私の作品が観客の意識の中で新たな意味や世界観を創りだす装置のような機能をはたすことができればよいと考えている。

観客が作品によって示される空間に立ったとき、身体を通じて観客自身の意識の中に起こる出来事は主体的であるために客観性に欠け、あまりに不確かなものかもしれない。しかし、このような場の感覚によって、「身体が、今、ここにある」ということを強く自覚する事ができると私は考えている。

私は、人間の空間への関わりにおいて、自分を取り巻く世界、物事についてのあり方を問うこと、さらに人はそれらとどのように向き合うのか、といったことに関心がある。

人が占めている位置、身体、空間、時間、物の配置による人の視点や移動。これらは身体を起点とした観客自身の位置であり、場の感覚によって示されるものは、自らの存在を示すことに繋がる。作品の意味は観客の体験によって成立し、観客の参加そのものによって完成する。

あなたの存在と私の存在によって作品を完成へと導くことを、あなたの存在と私の存在の証明とする。

国谷隆志

**国谷 隆志 / KUNITANI, Takashi**

1974年 京都府生まれ、1997年 成安造形大学 立体造形クラス卒業

おもな個展

- 2012 Make a mistake in choosing (Gallery PARC/京都)、two passages (京都芸術センター/ニュー・ブランシュKYOTO 2012)
- 2011 MARS (Gallery PARC/京都)
- 2008 Untitled Series (Contemporary And Spirits CAS/大阪)
- 2007 The Vertical Horizon (大阪府立現代美術センター/大阪)
- 2005 国谷隆志展 (Contemporary And Spirits CAS/大阪)

おもなグループ展

- 2013 Pavilion 0 (Signum Foundation Palazzo Dona/ヴェネツィア)
- 2012 アブストラと12人の芸術家: プレイベント (大同ビル/京都)
- 2011 モトコーART train (神戸元町高架下通商店街/神戸)
- 2010 NEW WORKS「接続熱源」(ギャラリーほそかわ/大阪)
- 2009 MASSIVE PROGRESSION (ギャラリーアーティスロング/京都)
- 2008 LOCUS (神戸アートビレッジセンター/神戸)、Art Court Frontier 2008 #6 (アートコートギャラリー/大阪)

**展示作品**

**Sand Piece( 35° 0' 31.7" N 135° 45' 58.74" E )**

2013 ガラス、砂、ステンレススチール

※入口部分にある砂山から砂を取り、会場内3箇所を設置されたガラスによるオブジェクトにご自由に入れていただけます。

**Mirror Site**

2013 引っ掻き傷を付けたステンレススチール、アクリル絵の具、パネル

1階エントランス

**Untitled( White Composition I )**

2013 ネオンチューブ、変圧器、ガラス、鉄